審査員のことば

東京大学大学院総合文化研究科
教授
酒井 邦嘉

私は今回初めて幼児と小学生低学年の作文を審査しました。それだけに、その鮮烈な印象は衝撃に近いものでした。短い文章の中に心に響く言葉があり、その純粋さに何度も目頭が熱くなりました。そして、原稿用紙のマス目にきちんと並んだ手書きの文字が愛おしいくらいです。一字一字ていねいに書くことは、あらゆる学習の基礎となる大事な第一歩だと言えるでしょう。それに、6歳児も練習すればどんな漢字だって書けるようです。文章にもしっかりした流れや起承転結が見られます。リアルな会話文が読み手を引きつけます。そうした書く力や文章力をどうやって身につけたのか、できれば直接聞いてみたいところです。これは、人間の言語を対象として脳の研究をしている私にとって、とても興味のある問題でもあります。

「子どもらしい」発想だろうと大人が想像することは、本当の子どもの考えとはなかなか一致しないものです。子どもにとっては、自分が経験したり空想したりする範囲が世界のすべてです。それを直接受け止められるところに、子ども独自の視点が現れます。そうした子どもが元々持っている十分伸びやかな感性を、作文で素直に発揮させてあげたいものです。私は「自然であること」を大切に考えて審査しました。今回は本当に良い作品がたくさんあったと思います。